

琉球大学学術リポジトリ

混沌とした黙を迎える中国南部

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 根路銘, 国昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016846

混沌とした^{しじま}黙を迎える中国南部

生物資源利用研究所所長
根路銘 国昭

范洋とかすむ疫学像，1997年のH5N1インフルエンザウイルスの出現，人類の危機存亡と唱える者，無装備でウイルス前線に飛びだしていく者もいた。が，くだんのウイルスは何の遺言もの残さず闇に消えていった。分子生物学がこれほどに進んだ今日にあっても，大流行へと結びつく道筋は依然としてみえてこないのである。

あれから5年後の冬，米国CDC (Centers for Disease Control and Prevention) のKeiji Fukuda博士から不思議なe-mailが寄せられてきた。目下中国南部に滞在，原因不明の重症肺炎の調査中，でも，中国政府当局の協力がままならず，という苦汁の内容であった。この間に，中国の福建省に接点をもつ1人の幼子からH5N1ウイルスが発見され，事態の背景には同ウイルスの暗躍が推定された。続いて入ってきたe-mailにもその感触が臭った。

原因が特定されないまま，中国南部の広東省で重症急性呼吸器症候群 (Severe Acute Respiratory Syndrome: SARS) 患者は勢いを増して拡大の一途をたどり，2002年の12月から本格的に口火を切った流行は翌年の2月3日から14日にかけてピークに達し，合計305名の患者中5名が死亡するという事態に発展，若い年齢層を中心に老若男女がこの災害に遭遇していた。流行の火の手は香港を経由，第1波はベトナム，シンガポール，マレーシア，タイ，インドネシアというふうには，1957年のアジアかぜインフルエンザの伝播ルートを再現してみせた。さらに，香港から，カナダ，米国，そしてヨーロッパで野火のように広がっていくさまは新型インフルエンザ登場時のそれを思い起こさせた。特に注目されるのは，香港を飛び立つ婦人にとりついたSARSは3月21日にその旅人を死亡させるという最悪のシナリオを残し，死の直前にも5人の親族に手をかけそのなかの1人を殺していた。

恐怖が大きく渦巻いていく背景には，WHOの提唱するコロナウイルス説に加え，パラミクソウイルス説，中国側はクラミア説を頑固に主張して譲らなかつたという情報の混乱があった。加えて3～5%という死亡率の高さと，有効な治療法が確定していなかつたことも大きな要因として考えられよう。

この病気の真相解明に重要な役割を演じていたのは米国調査団，さらに，これを核とするWHO調査団の活躍とアジアの国の研究者の協力，そして中国の保険当局であった。残念ながら，この段階でも日本の顔はみえてこなかつたが，米国の支援を受けたWHO調査団の疫学調査戦略，米国の研究室で実施させた犯人特定の手法はきわめて論理的であった。

たとえば，よく訓練された聞き取り調査法によって新しい患者の発見に努める，第2，第3の患者発生を接触者の綿密な管理下において未然に防ぐ，これに中国CDC，北京のCDC，広東省のCDC，広州市の病院にウイルス特定用のネットワークシステムを立ち上げたことが注目される。そして，これを5つの行動計画で外枠が支えるという構図が特徴的である。その5つとは，患者の早期発見と治療，病院とクリニックにおける感染対策，疑似患者の迅速な報告，患者との接触者の綿密な追跡調査—そのための公衆の意識の高揚キャンペーンと教育である。

第2の戦略は，米国で実施された原因の特定法，ウイルスを培養する，電子顕微鏡でウイルスの顔をみる，PCR法でウイルスの遺伝子を釣り上げる，間接蛍光抗体法でウイルス蛋白を捕捉するという柱で構成するというものであった。その結果，まずSARSはコロナウイルスが犯人であることが特定され，ついに29,727の全塩基配列も決定された。N，SおよびM遺伝子の進化系統樹は，ヒトに分布するコロナウイルスのI型，II型，トリに分布するIII型とも明確に違い，多分に，第IV型に分類してもよさそうである。そのルーツは多くの変異型が存在するニワトリの伝染性気管支炎ウイルス (avian infectious bronchitis virus: IBV) の領域に近いと想定され，新型インフルエンザ登場の図式に似ている。系図上のSARSウイルスはジャコウネコ科のハクビシンなどで発見されたコロナウイルスに限りなく接近していた。多分にハクビシンも終末宿主と考えられ，その先に真の宿主が存在していそうだ。来る冬から春にかけ，暗黒の明滅から登場してくるのはSARSか，はたまた新型インフルエンザか，中国南部から目が離せない。

結局のところ，5月12日現在の被災国は33，患者数は7,447名，死者は500名以上，SARSはかくして市民権を得たのである。それにしても，SARS事件で顔を見せられなかつた日本人科学者，実験室での実績を背景にした真の若手疫学者の育成と成長を望むところだが，このためには，国立研究所の組織形態の全面的見直し，中枢部要因を視野に入れた外部評価制度の導入，多分，このなかで特別行政法人も視野に入れた厳しい議論も必要になってこよう。